

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成29(2017)年4月1日発行 (年4回1・4・7・10月)
3,800部発行 無料 古紙バブル配合再生紙使用



名古屋市博物館の「40周年」が始まります

名古屋市博物館は、昭和52年(1977)10月1日に開館してから、今年で開館40年を迎えます。

名古屋を特徴づける歴史資料を主に収集・保管し、その数はこれまでに26万点を超えました。その内の9割が市民の皆さまからの寄贈によるものであり、まさに市民によって作り上げられた博物館です。

また、これらの資料や調査をもとに、名古屋を中心とした地域の歴史や文化を紹介する展覧会、国内外の優れた文化を紹介する展覧会を数多く開催してきました。

様々な形で市民や学校・企業などの団体の皆さまと共に事業を実施することにも努め、多くの方々の支えにより、この博物館は成り立っています。

40周年を迎え、蓄積を活かしながら、さらに親しまれ愛される博物館の事業を実施していきます。

「博物館、とっておきのご披露です！」

常設展示室では月替りで国宝、重要文化財や尾張の文化を代表する名古屋市博物館らしい逸品を展示していきます。本物に出会う感動をご堪能ください。

40周年記念特別展

「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」(4/22-6/11)、「ゴジラ展」(7/15-9/3)、「ピーターラビット展」(9/16-11/5)、「北斎だるせん！」(11/18-12/17)、「レオナルド・ダ・ヴィンチと「アンギアーリの戦い」展」(1/13-3/25)など、日本と世界の優れた文化に出会える魅力的な展覧会が目白押しです。

交流事業

世界へ、地域に開かれた博物館として、4月28日には姉妹館であるウィーン博物館長による講演会、開館記念の10月1日には、博物館を舞台に市民と共働して幕末に大流行した「ええじゃないか」のパフォーマンスなどを開催します。

40周年を迎えた博物館は、本物と出会う感動、日本や世界の文化を知る感動、名古屋の歴史を体験する感動、様々な「感動をよびます博物館」を目指していきます。ぜひお楽しみください。

名古屋市博物館長 伊藤彰



よみがえれ！ シーボルトの日本博物館

19世紀、アジアのさい果ての国「ニッポン」に憧れ、オランダ商館の医師としてやって来たドイツ人、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト。二度の来日で熱心に博物学的な収集をおこない、日本の自然や生活文化を中心とした膨大な数の物品を持ち帰りました。彼はこれを駆使して、ヨーロッパに日本を紹介するための展覧会を何度も開きましたが、それは万国博覧会やジャポニズムの流行の先駆けとなる活動でした。この「日本博物館」の実現に生涯をかけた彼の没後150年を記念し、厳選した約300点の品々が今回ドイツから里帰りました。シーボルトが魅せられ、またヨーロッパの人々に見せようとした「ニッポン」の姿にせまります。

写真1 シーボルト肖像(部分) 19世紀後半 SAB

第1次来日 (1823-1828 文政6年-11年)

オランダから派遣されたシーボルト(写真1)の主な任務は、蘭日貿易再構築のための物産収集調査でした。長崎に来航したシーボルトは出島の外に塾(写真2)を構えることを特別に許され、教を請うため全国から集まった弟子たちに西洋医学などの学問を伝授しました。一方弟子たちは彼の収集活動を支えます。名古屋出身の伊藤圭介(写真3)もその一人でした。シーボルトは日本女性おたき(写真4)を伴侶とし、おいね(写真5)という娘までもうけますが、極めて広範囲に及ぶ情報収集活動がやがて幕府にいらまれて国外追放処分に近い、おたき達を日本に残したままやむなく帰国します。



写真4 おたき肖像(部分)『日本』図版 19世紀後半 SAB



写真5 イネ肖像画(部分) 江戸時代後期 SAB

第2次来日 (1859-1862 安政6年-文久2年)

30年もの間日本への再渡航を念願としていたシーボルトに、日本の開国が突然チャンスをもたらしました。国外追放処分も解かれ、長男アレクサンダー(写真6)を伴いオランダの商事会社顧問として長崎に再び入港、日本の家族や弟子達とも再会を果たします。一時は幕府顧問として江戸にも居住し、そこでも日本展示の充実・完成を目的とする収集活動を熱心におこないました。やがて収集活動自体は若き長男に託し、彼は帰国します。

写真6 アレクサンダー(部分)
「日本からの公開状」図版
1861年 MFK



写真2 鳴滝の家屋模型
江戸時代後期 MFK

写真3 伊藤圭介肖像(部分)
19世紀後半 SAB

オランダでの日本展示

シーボルトは日本滞在中から、「展示」によって日本を具体的に紹介する意図を持っていました。帰国した彼は『日本』・『日本植物誌』(右ページ背景)などの出版とあわせて、持ち帰った日本の物品(第1次収集品)をライデンの自宅などで公開しました。この、物品の展示によって他民族への知識を深める、という手法は、ヨーロッパで高い評価を受けました。やがてオランダ政府に買い上げられた第1次収集品自体が「日本博物館」と呼ばれるようになっていきます。

展覧会情報

会 期	平成29年4月22日(土)～6月11日(日)
休 館 日	毎週月曜日・第4火曜日 (4/24・25、5/8・15・22・23・29、6/5) 5/1は特別開館
観 覧 料	一般1,300(1,100)円・高大生900(700)円 小中生500(300)円 ※()内は前売りおよび20名以上の団体料金
主 催	名古屋市博物館、毎日新聞社、日本経済新聞社、 テレビ愛知、人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館、 朝日新聞社
特別協力	ミュンヘン五大陸博物館 ブランデンシュタイン=ツェッペリン家
協 力	全日本空輸、名古屋市東山動植物園
後 援	日本赤十字社

ミュンヘンでの最後の日本展示

ヨーロッパに戻ったシーボルトは、第2次収集品による日本展示をさっそくアムステルダムで開催しました（左ページ背景）。さらに彼は「日本博物館」常設化の可能性を追い求めて故郷のドイツに移り、ミュンヘンの王宮でも大規模な日本展示（写真7～12）を開催しましたが、直後に急逝してしまいます。しかし第2次収集品がその後バイエルン政府に買い上げられたことで、彼の夢であった「日本博物館」は、やがてミュンヘン五大陸博物館の中核展示として結実していきました。このシーボルトが遺した、私たち日本人にすら当時の「ニッポン」を彷彿とさせてくれるタイムカプセルが、名古屋に登場します！

（加藤和俊）



写真11 毛植人形 江戸時代後期 MFK
とても小さくてリアルな動物たち



Tab. 32



写真7 花鳥図衝立 江戸時代後期 MFK
アムステルダムでの日本展示の象徴

写真8 魚形蓋物(鯉)
江戸時代後期 MFK
片身が外れる
宴会用盛付け皿



押しよせるニッポン。

写真12
鉄線時絵燈籠形弁当箱（部分）
江戸時代後期 MFK
分割して使える
行楽用食器セット



写真10
花鳥螺鈿シガレット箱
江戸時代後期 MFK
貝で華麗に飾った
紙巻タバコ入れ



写真9 赤絵染付諫鼓鶏香炉
江戸時代後期 MFK
泰平の世を象徴する鶏形の香炉



背景写真

左ページ アムステルダム日本資料展覧会に関する雑誌記事（部分）1863年 SAB

シーボルトの日本展示の陳列のありさまを描いた貴重な1枚

右ページ オタクサ『日本植物誌』図版19世紀 SAB
学名に伴侶おたきの名を付けたアジサイ

11



※SAB ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家蔵
©Brandenstein-Zeppelin Family Archives
※MFK ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich

40周年記念ロゴマークが 決定しました！



名古屋市博物館は今年で40周年を迎えます。この記念すべき年を市民の皆様と共に祝い、またこれからも共に歩んでいけるよう、市民投票で選ばれました記念ロゴマークを掲げ、この一年活動します。

今回は、名古屋市立工芸高等学校デザイン科3年生のご協力のもと、2016年9月から「博物館の未来を感じさせる」ロゴマークの候補を制作してもらいました。館内選考を経て候補を3つに絞りこみ、11月から約1ヶ月間、40周年を迎える博物館にふさわしい候補の投票を行いました。投票方法は館内の投票所、Facebook、メール、名古屋市LINE@と、複数展開し、のべ4,421票の投票がありました。

開票の結果、全体の6割にもものぼる2,890票を獲得した澤尻彩花^{さわじりあやか}さんの作品のロゴマークに決定。2017年1月10日に、澤尻さんはじめ、工芸高校デザイン科の皆さんへ、当館40周年記念事業への協力に対する感謝状を贈呈しました。



伊藤館長（左）より感謝状を贈呈される澤尻さん（右）

「博物館の明るい未来を連想できるよう思いを込めて作りました。自分の作品が世の中の役立ててもらえることがうれしい」と澤尻さん。入学当初難しいと感じていたパソコンでのデザインも、今では自分の思い通りのものが作れるようになったとのこと。「色の使用は4色以内という先生からの指示と、博物館からの修正依頼をクリアしていくことは大変でした。」と、こっそり制作秘話も明かしてくれました。

40周年を迎えた博物館が、このロゴマークとともに皆様にとってより親しみやすい存在になれば幸いです。

陸前高田市立博物館 との友好提携

平成29年（2017）2月17日に、名古屋市博物館と陸前高田市立博物館は、友好館の協定を結びました。

陸前高田市立博物館は、昭和34年（1959）に開館し、地域に根差した活動を継続してきました。しかし、東日本大震災によって甚大な被害を受け、現在は廃校になった小学校に移転し、被災文化財の修復を進めながら、文化財の大切さを伝える活動を行っています。

名古屋市は、行政丸ごと支援で陸前高田市の復興を手伝い、また、両教育委員会では子どもたちの継続的な交流を目的とした「絆協定」を結ぶなど、双方の絆を深めてきました。さらに、名古屋市博物館では、修復された陸前高田市立博物館の文化財を紹介する「陸前高田のたからもの」展を平成28年に開催しました。こうした縁があり友好館として提携することになったのです。

調印式は大勢のマスコミに取材され、両教育長からは、「歴史・文化、さらには災害なども次世代に

伝えていくことが博物館の重要な役割である」、「友好館の提携による今後の活動が、ハードの復興だけでなく、ソフト・心の復興に寄与していく」といったコメントがありました。

今後名古屋市博物館と陸前高田市立博物館は、学術的な交流を通じて、お互いの歴史や文化を両市民に伝えていくとともに、文化財の大切さを伝えること、より魅力的な博物館となっていくことを目指し、お互いに協力していきます。



調印式での固い握手
（左から、本多陸前高田市立博物館長、山田陸前高田市教育長、杉崎名古屋市教育長、伊藤名古屋市博物館長）

博物館と学校の連携で大切なものは…

「教育は人なり」

教員を退職した後、名古屋市博物館に来て3年。微力ながら博物館と学校の橋渡し役を務めてきました。博物館の主な業務の一つに「教育普及」があります。28年度は、常設展の見学をはじめ職場体験・職場訪問、小学校3年生対象のくらし体験事業、学校に出向き特別に授業を行う出前歴史セミナーと、合わせて2万人近くの児童・生徒に博物館を利用してもらいました。これからも、学校との連携をより密にし、歴史好きな子どもを育てていくことが大切だと考えています。

そこで、博物館と学校との連携を密にしていくために重要なことは、博物館の学芸員と学校の教員それぞれの持ち味や良さを活かすことに尽きると考えます。子どもたちと直接接する「人」がポイントを握っているのです。学芸員の専門性は資料に対する造詣の深さにあり、教員の専門性は子どもの実態を踏まえ、教える技術にあります。博物館には貴重な歴史的資料が豊富にありますが、モノだけでは子どもの心に響きません。子どもたちが歴史に興味を持ち、調べたいという意欲が高まり、「分かった」と思えるように、資料の持つ意味を子どもたちに紹介する「人」が大切です。

「歴史教室」の思い出

「歴史教室」とは、昭和58年度から平成19年度まで25年間にわたって名古屋市博物館が実施してきた事業です。夏休み中に小学校6年生や中学生が博物館を利用して、火起こし、埴輪づくり、草鞋づくりなど、テーマを決めて体験を行ったり、現地ツアーに出かけたりしました。私も30年近く前に若手教員として参加させていただきました。その年のテーマを決める段階から教材づくり、学習活動を吟味する段階まで、事前に学芸員と学校の教員がきめ細かく検討を重ねました。教員は日頃の子どもの姿を思い浮かべて、こんな教材や学習活動が効果的ではないかと考えを巡らせ、学芸員は博物館にある資料を活用して可能なテーマや歴史的な事実から考察を加え、学芸員と教員がそれぞれの持ち味を発揮しながら子どもたちにとって実りある事業を実施しました。これこそ博物館と学校との連携のあるべき姿だと思います。

出前歴史セミナーでは

現在博物館が行っている事業の中で、学芸員と教員の連携が効果的に行われているものとして出前歴史セミナーがあります。出前歴史セミナーは、博物館にある資料を学校に持参し、遺跡から発掘された出土品に触れたり、火縄銃を構えたり、からくり人形を操作したりするなどの体験と学芸員による解説で授業を構成しています。どの体験でも子どもたちは、初めて触れる歴史的資料にわくわくしながら、楽しそうに参加しています。さらに、学芸員が専門的な知識を基に話をすることによって、理解が一層深まっていきます。学芸員の話聞いていたときの子どもたちの目はきらきらと輝いています。また、例えば「名古屋の祭りとかからくり人形」のプログラムでは、からくり人形の体験の際に、まず教員が体験をして子どもたちが体験する時に気を付けるとよいことなどをアドバイスしてもらいます。子どものことをよく知っている教員からの一言は、子どもたちの活動意欲を一気に引き上げます。

こうして学芸員と教員との連携によって歴史的な意味を学習した結果、「社会科は苦手だったけど、これからはがんばって勉強したい」という、子どものうれしい感想も見られました。



からくり人形の体験をする子どもたち（稲生小学校）

今後の学校連携は

最近、市内分散学習として子どもだけで常設展の見学に来る学校が増えてきました。学校の先生方には、見学の視点を持たせるなど事前の指導をぜひお願いしたいものです。見学について遠慮なく博物館にご相談いただきたいです。そして、受け入れる側の博物館は、学芸員の出番をもっと設けるとよいと思います。できるだけ展示会場に出向いたり、教育普及の事業に積極的に出向いたりして、来館者と接することで顔が見える活動を心がけるとよいのではないのでしょうか。今後も、「人」を前面に据えた博物館と学校との連携を進めていくことが大切であると考えています。（大嶋和明）

博物館、とっておきの ご披露です! ~春の巻~

3/29(水)
4/23(日)

【重要文化財】

太刀 銘「行平作」

鎌倉時代 館蔵 (鈴木コレクション)



《通年企画》刀剣

名古屋博物館が所蔵する200振以上の刀剣のなかでも特に優れた太刀です。行平は、鎌倉時代前期に活躍した豊後国(大分県)の刀工で、後鳥羽天皇の御用を務めたと伝えられています。細身で手元でぎゅっと反った優美なフォルムと、刀身にある仏像の彫り物など行平の特徴をよく示しています。徳川將軍家に伝来しました。

山田伸彦(美術工芸)

※館蔵の名刀を月替りで展示します

6/6(火)
7/9(日)

【名古屋市長指定有形民俗文化財】

荒子西屋敷馬標及び馬道具

明治~昭和後期 館蔵

《テーマ16》まつり

馬の塔は、寺社に飾り立てた馬を奉納するお祭りです。中川区荒子の馬の塔は、馬を飾る馬道具が豪華なことで知られます。迫力ある飾りは重量も相当なもので、乗馬用のスラリとした馬では背負えないそうです。普段運搬や農耕のために働いているどっしりした馬が、ハレの日に豪華に飾られた様子を想像すると、どこかほほえましいものがあります。

鈴木雅(民俗)



5/24(水)
6/25(日)

【重要文化財】『三宝絵』

平安時代 保安元年(1120)書写
館蔵(関戸家伝来)

《テーマ10》古筆 名古屋が誇る名品

若くして仏門に入った尊子内親王のために永観2年(984)に著された仏教教養書です。書き写された年代が保安元年(1120)と現存最古のものです。雲母で装飾された美しい紙と、

息の長い優美な筆づかいが見どころ。冊子から切り分けられたものは「東大寺切」の名で各所に伝わっています。

星子桃子(文書典籍)



4/26(水)
5/21(日)

【重要文化財】四季山水図屏風

室町時代 真宗大谷派名古屋別院蔵

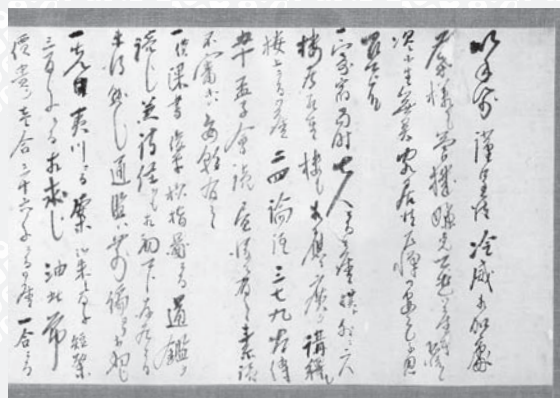
《テーマ10》四季山水図屏風

豊かな自然に見る四季の情景を描いた室町時代の屏風です。向かって右から順番に春夏秋冬の光景が配され、四季の移り変わりを実感できます。濃い墨、薄い墨を使い分けて景物の遠近や自然の気象を表現する水墨画の名品ですが、実は着色された部分もあります。梅花の白に、柳の緑、夕陽の赤。要所に光る彩色に注目です。

横尾拓真(美術工芸)



収集活動は博物館活動の基本です。市民の皆様のご協力のおかげで蓄積されたコレクションから、1年間を通して常設展示室内で博物館の逸品を紹介します。国宝や重要文化財、教科書にも載っている資料や尾張の特徴的な文化などを幅広く展示していきます。本物からしか得られない感動をぜひ味わってください。



4/11(火)
6/25(日)

伊藤圭介書状

江戸時代 文政4年(1821)
伊藤圭介先生顕彰会蔵

《話題のコーナー》伊藤圭介

伊藤圭介は名古屋生まれの植物学者で、オシベ・メシベを命名したことで知られています。この書状は文政4年(1821)19歳の時、京都の蘭学者藤林普山の塾に留学した圭介が、そのようすを父親に報告したものです。油(照明用)が高いとか、塾では朝晩はおかゆのみで、昼におかずが一品付くだけだといっています。苦労していますね。

種田祐司(文書典籍)



4/26(水)
8/20(日)

円空作 十一面観音立像

江戸時代 館蔵(栢木下郷家伝来)

《話題のコーナー》円空仏

江戸時代、全国を遊行して多くの仏像を残した僧、円空。この像は緑区の旧家に伝わったものです。円空仏としては大型の像で、とても丁寧に造形されています。下半身に波か雲のようなものを彫り出す表現も特徴的です。円空は像の背面に航海の神である金毘羅(こんぴら)を十一面観音の姿で表したと記していて、彼の宗教観を知る上でも貴重です。

山田伸彦(美術工芸)



4/26(水)
6/25(日)

ハマグリマンガ(下之一色漁業資料)

昭和 館蔵

《フリールーム》伊勢湾奥部の自然環境と暮らし

名古屋市市中川区下之一色の漁師さんが、昭和30年代まで使っていた道具です。漁に出たのは、主に伊勢湾内でした。伊勢湾は遠浅の海で、名古屋に近い湾奥は河川からの水と海水が混ざり、多くの魚介がすんでいました。魚を捕らえる網や貝をかき取る道具など、様々な漁具は、そんな海的环境に対応したくらしを探る手がかりになります。

長谷川洋一(民俗)



3/29(水)
4/23(日)

火焰型土器

縄文時代中期(約4500年前)
出土地不明 館蔵

《フリールーム》焼き物の造形美

深鉢の口縁には鶏のとさかのような取っ手、胴体には浮き出るような渦巻き状の模様などが表現された縄文土器です。過剰なまでの、まるでうねる炎のような装飾に、縄文人はどのような思いを込めたのでしょうか。かの芸術家岡本太郎をも感動させた縄文土器を代表する立体的な造形美を堪能ください。

瀬川貴文(考古)



資料紹介

太閤花見図屏風

桃山時代 六曲一双 館蔵

開館40周年記念事業「博物館、とっておきのご披露です!」の幕開けとして、この季節に相応しい館蔵の優品を紹介しつつ、描かれた情景の意味を探る。

誰がどこで何を？

三人の貴人たちが仰ぎ見る先には桜樹に囲まれた楼。人物描写や、画面を対角線上に分割する塀、金雲と金霞の巧みな構成に圧倒される一雙屏風である。

慶長3年(1598)の醍醐寺での花見を象徴的に描いたものとされ、左隻の黒袍姿は豊臣秀吉とみられる。そして僧形の人物は醍醐寺座主である義演准后(1558-1626)、烏帽子姿の公家は義演の兄であり、秀吉に関白職を譲った二条昭実(1556-1619)と考えられている。作者については装飾的で幾何学的な構図から、長谷川等伯の娘婿、等学(生年不詳-1623)との説が提示されている。

確かに等学好みの構図であるが、人物表現に目を向けたとき、他の等学作とは異なる印象があるため現段階で断定するのは留保したい。しかしながら金雲の形や大らかな空間構成からみて、制作年代は等学と同時代の慶長年間(1596-1615)と考えてよいだろう。

秀吉と花見と醍醐寺

ところで醍醐寺の復興に手厚い庇護を与えた秀吉に、義演はひとかたならぬ恩義を感じていた。

花見から9カ月後の12月(このときすでに秀吉は亡くなっている)、寺内金剛輪院(現三寶院)の御殿と庭園が完成した折には、「太閤御所の御芳恩は言葉にならない。去春のお花見で突然のお渡りがあり、坊舎のことを仰せつけられた。そのお言葉によってこのように奉行衆の沙汰があり(工事が成った)、

身に余ることである。」と日記にしたため、さらに翌4年の3月にいたっても「去年の今日は太閤御所と北政所などが当寺へお花見にいらっしゃった。これ故に御殿を建立することができ、また領地も拝領した。御芳恩ありがたいことである。」と改めて感慨にふけるのである(『義演准后日記』)。つまり義演にとって「秀吉の花見」は、念願であった「醍醐寺伽藍復興」のきっかけとして大切な思い出だったのである。

醍醐の花見？

そもそも慶長3年の醍醐の花見自体は、秀吉が北政所はじめ身近な女性たちを楽しませるためのプライベートなイベントだった。重要文化財「醍醐花見図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)では、華やかな小袖をまとった秀吉が、同じく着飾った女性たちと桜咲く山間をそぞろ歩く様子が描かれており、こちらは本イベントの記録として制作されたものと考えられる。

比べて、本作に描かれた秀吉の黒袍という威儀を正した装束や当時の醍醐寺の状況を鑑みると、ここで描かれているのは同年に催された花見の実景ではなく、完成を見ることなく逝った秀吉とともに、ゆかりの桜のなかで醍醐寺の伽藍復興を祝う架空の景なのではないか。象徴的、あるいは幻想的な画面構成は、それゆえではないだろうか。

展示のご案内

この屏風は平成29年(2017)3月29日(水)～4月23日(日)、常設展「尾張の歴史」テーマ10にて展示される。大胆な構図のために見落とされがちだが、思いのほか細部まで気を配った筆遣いに驚かされる。描き分けられた相貌、意匠化され上面に雲母を掃くことで煌きを表した波、胡粉で盛り上げた上に彩色された桜の花弁、一枚ずつ丁寧に筆を運んで表された檜、榎、杉の葉…。ぜひこの機会にご注目いただきたい。

(津田卓子)

